

# 日本語教育における聴解教育

桑原 直子

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2009年10月1日 受理)

## はじめに

留学生 30 万人計画の実施にともない、近年留学生の数が大幅に増大しているが、中でも中国人学習者の数は圧倒的に多く、倉敷芸術科学大学留学生別科においても、その 8 割以上を占めている。

日本語教育において、本学での主要学習者ともいえる中国人学習者を見てくる中で、そのひとつの特徴として文字語彙や文法の習得に比べ、聴解活動に苦手意識を持つ学生が多いことが挙げられる。

そこで、本論文では、聴解活動とはどのような意味を持ち、実生活において私たちはどのようなプロセスを経て聴解活動を行っているのか、そして日本語教育においてどのように聴解力を高めていくことができるのか、という疑問に基づき、聴解活動について考えていくこととする。

## 1. 聴解活動とは

私たちは実生活でどのようにして聴解活動を行っているのでしょうか。聴解とは音声情報を取り込むだけの受動的な活動であると考えられがちであった。しかし近年の研究では、音声から意味を理解していく過程はむしろ能動的で、積極的な活動であるという指摘が多く見られる(尹松 2000, 笠原他 1994 など)。確かに実生活における聴解活動において、音声から意味を理解していく過程で、私たちは耳だけを使っているわけではなく、見たり、話したり、想像したりと多くの機能を働かせ、能動的、積極的に行っている。つまり、聴解活動の第一の特徴として、聞くことのみをとりあげれば受動的ではあるが、聴いて理解するという意味では聴解は能動的で、積極的な活動であるということが挙げられる。また、次の特徴として挙げられるのは、「聴解とは常に目的を持った行動である」(UR1984)ということである。実際私たちは、明日の天気を知るために天気予報を聞く、乗り継ぎ情報を得るために電車内のアナウンスに耳を傾けるといったように、ある「目的」を持ち聴解活動に臨んでいる。以上より、聴解とは、ある「目的」をもち「能動的、積極的」に「聞く」活動であるということが出来る。そして実生活においてこのように聴解活動を進めているのだとすれば、日本語教育の現場で聴解活動を行うときも、学習者にある目的を持たせ、能動的かつ積極的に聞かせる場面を作ることが、非常に重要になってくるといえるだろう。

## 2. 実生活での聴解のプロセス

私たち日本語母語話者が日本語を聞く場合、決して一字一句すべてを聞いているわけではない。各自の「目的」により、集中して聞く部分と、リラックスして聞き流す部分をより分けて聞き、必要な情報のみを収集し、周りにいる人に尋ねるなどして内容を確認する。つまり、①なぜ聞くのか目的を特定し、②聞く内容に含まれる情報を予想し、③「目的」をクリアするためには何を聞き、何を無視すればよいのかを考え、④自分が理解したことが発話者の意図したことに合致するかを確かめるという、4つの心理ステップを使い、聞いている内容、発話の意図、目的を理解しているのである。(Rixon1981)

また、フォード他(1990)は「内省すると私たちは主に名詞しか聞いていないのではないかと思う。すなわち、私たちは補語(一定の格に立つ名詞)の名詞から、後ろにくる述語をかなり正確に予測している。」と述べ、全てを聞くのではなく、ポイントとなる語彙を聞き、そこから言語知識や社会常識を駆使して、その後何を言いたいのかを「推測」するというプロセスを経ていることを指摘している。そして、土岐(1988)は、多少の雑音があっても必要な部分をきちんと聞き取れることができるのは、潜在的にその中から必要な言葉を抽出して聞き分ける能力があり、多少聞き逃したとしても、場面や文脈、背景知識から判断して補い、ある程度復元して理解する能力を用い、耳ではなく頭できいているからであると述べている。

以上より、実生活での「聴解」では、①「聞く目的」を定め、②「聞く情報」を選択し、③「ポイントとなる語」から次を予測する、そして④たとえ聞き逃しても場面や文脈から判断して補い、ある程度復元して理解するというプロセスを経ているといえる。

## 3. 日本語学習者の聴解力

### 3-1 聴解の段階と向上の要素

日本語学習者の聴解力についてその段階と向上の要素を具体的に考えてみる。

学習者は聴解においてどのような段階を経ているのか、坂本(1989)を参考にまとめると以下ようになる。

一般的に聞き取りの能力とは、学習者がその時点で持っているその他の日本語力と、一般的な理解力に大きく左右されるが、聞き取りにはいくつかの段階が考えられる。それは①無意味な音の羅列から音のまとまりを取り出すことのできる状態へいく段階、②単語レベルでの意味のまとまりを認知できる段階、③一文程度の長さまで聞き取れる段階、④全体が見え意味がつかめるようになる段階である。

そして、これらの段階を経て聴解力が向上していく過程に必要な要素として、①わからない音の連続(知らない語)を切り捨て、文脈から類推する能力、②文脈から次に来る語を予測する能力を挙げている。この予測する、あるいは類推するという能力については、吉岡(1980)でも未知の語の意味を類推する力と、文脈から文の流れを予測する力が要求

されると指摘されている。

### 3-2 聴解における困難

聴解力の習得にあたり、学習者はいくつかの困難にぶつかることとなる。実際にどのような点を学習者は「難しい」と感じるのか、聴解における困難を、先行研究および、実際に授業を行ったときの経験をもとに考えてみる。

まず、語彙面における困難を考えてみると、固有名詞や慣用句、外来語は特に聞き取りにくいのではないと思われる。固有名詞と慣用句については文脈からの類推ができない場合が多く、音をとにかく聞き取り、すぐに辞書で調べるといった姿が教室でよくみられる。また、外来語については、聞き取った音からもとの語を想像できないため、意味がつかみにくい場合が多いようである。これら以外に、和語も聞き取りにおいて難しいという指摘もある。これも外来語と同じで意味がつかみにくいからである。つまり語彙面において練習で向上させることができるのは、漢字を想像することで知らない単語でも何となく見当をつけることができる「漢語」であるということができる。

次に音声面における困難であるが、これは拍の取り方、促音、長音の問題、イントネーションやプロミネンスの違いで意味が異なる場合その区別などが挙げられるであろう。

文法的な面では、語彙は聞き取れているが、それを文章にすることができない場面が多々見受けられる。つまり、聞き取った語彙と語彙をどう結べばよいかわかっていないのである。また、教室で日本語を初級から学習した学生は「です・ます」体で積み上げてきているため、短縮形や倒置など、話し言葉の特徴を含む会話の聞き取りには困難を示すように思われる。

そのほかには、文化的背景知識の欠如がもたらす聞き取りの困難があげられる。

## 4. 日本語教育場面での聴解活動

ここまで、実生活での聴解のプロセスや学習者の聴解力の段階と向上の要素、そして聴解の困難について考えてきた。以上をもとに、実際の授業を振り返るとともに、日本語教育場面での聴解活動にどのような可能性があるのかをさぐっていききたい。

### 4-1 聴解のプロセスの活用

実生活での「聞く」という活動では、①「聞く目的」を定め、②「聞く情報」を選択し、③「ポイントとなる語」から次を予測する、そして④たとえ聞き逃しても場面や文脈から判断して補い、ある程度復元して理解するというプロセスを経ていることを述べた。私たちが第1言語を用いる実生活でこのように「聞く」という活動をこなしているのだとすれば、第2言語でも同じプロセスを経る練習を重ねることで、より自然な聴解活動を行うことができるようになるのではないかと推測される。そして実際にこのプロセスを授業に取り入れる時に重要なのは、学習者にただ聞かせるのではなく、「聞く目的」を与えることである。それは教師が事前にどのような内容についてのテープ、ビデオ、あるいはDVD

なのかを学習者に伝えることで可能となる。簡単な予備知識（トピック、場面、状況など）を与えることで、①②を行うにあたり、聞く目的を明確化し、背景知識を活性化することとなり、学習者が聴解のプロセスに自然と入っていくことを可能にするわけである。これはその内容に関係する写真を見せる、関連する生の音を聞かせる、広告を用いるなどして「導入」に一工夫することがいかに大切かということでもある。また、③④の予測する、推測するという力の育成についての指摘は多くの先行研究に見られたものである。実際にこのプロセスを丁寧に行いながら授業を進めることによって、学習者の一人は授業終了後「聞いた言葉を頭の中で漢字で書いてみるという方法を習ってからは、内容がよくわかるようになった」という感想を述べていた。

## 2-2 ビデオ・DVD教材の活用

聴解の困難で、話し言葉の聞き取りの難しさをあげたが、これらを克服するに当たり、ビデオ録画したニュース教材や市販されているDVD教材の使用は最も適しているのではないかと思われる。ニュース教材では、アナウンサーによって述べられる部分から漢語の拡大が期待でき、様々なタイプの人がインタビューアールとして登場する場面では、様々な音声での話し言葉を耳にすることができる。ドラマや映画の使用の実践例も多々見られるが、これらはすべてが話し言葉で構成されており、語彙の拡大を考えたときに、ニュース教材にすこしばかり劣るような気がする。また、ひとつの教材にかける時間というもの、ドラマなどだと、どうしても多くなり、授業にバリエーションがつかないということが危惧される。

また近年では『DVDで学ぶ日本語 エリンが挑戦！にほんごできます』など、留学生が日本語を学習する過程を元にしたDVDも発売されている。これらは、文法事項を丁寧にあつかいながらも、実際の会話や日本に関する文化知識的要素も取り入れられている。これらDVD教材の長所は、視覚をとおしながら、聴解活動を行えるという点で、学習者にとって、たとえ未知の語彙にであっても、その場の状況を見て語の意味を推測するという力を身につける練習として用いることができるであろう。

視覚情報を駆使し文脈を予想する練習ができるというビデオ・DVDの利点、また、実生活の聴解活動では話し手が見え、目に見える様々な示唆がある(Ur1984)ことを考えると、聴解教育において、テープ・CD教材に比べ、ビデオ・DVDのほうがより現実感が高まる練習になるといえる。

ここで、ニュース教材やDVD教材を使用する場合の留意点であるが、聴解練習では情報をあまりにも短時間に大量に与えすぎると、学生は情報を正確にプロセスできないということである。つまり教師は、聴解材料と学生の仲介者になり、学生の聴解の目的を設定し、注意を重要な点に集中させる役割を果たし、「予測」「情報の取捨選択」が円滑に行えるようにしなければならない。聴解練習として、ILP(Intensive Listening Practice:ある特定の構造、語彙の用法を学生に教えたいとか、理解させたいときに効果的)とELP

(Extensive Listening Practice：末梢的な内容を無視して、中心的な内容を理解するための練習として効果的)が挙げられる(當作 1988)が、ILP で重要なポイントを理解させてから、ELP で内容を把握する、あるいはその逆の方法を使うなど、授業ではこれらを効果的に使うことが教師にはもとめられるであろう。短いニュース番組やひとつの章が 10 分程度で構成された DVD 教材の理解において、授業では大きな主題から入り、詳細を理解させていくという方法をとることが多いが、これは ELP から ILP へ移行する方法として、非常に有効な方法であるということができよう。

### 2-3 再生練習

再生練習とは、幾つか与えられた語彙を、耳で聴き取った情報をもとに、助詞や動詞・形容詞の活用を加えながら、文章へと再生していく練習である。

文法的な面で、語彙はわかるが助詞がわからない、あるいは活用に問題がある、という問題をほとんどの学生が抱えている。「再生練習」はこれを克服するのに非常にいい練習方法であると思われる。わからないものは、いくら考えてもわからないのであるが、聴解をともなった再生練習の場合は、一度音声情報として耳にすることができ、解決への糸口が与えられ、その聞いた記憶をたどり、正しい日本語を構成してくわけである。これは、第 1 言語の習得過程でまさに行われていることである。つまり再生練習は自然習得で起こっている過程を、意識的に通っているのであり、非常に大きな意味があると思われる。また、言語教育では理解語彙と使用語彙の差について取り上げられることがあるが、理解語彙として聞いてわかったものを、自分で文章にしながら使うことで、使用語彙へと近づいていっているという点からも、この練習方法の良さは見えてくる。

### 4-4 発音練習との関係

音声面での困難を解消するには、聴解練習と発音練習を関連付けることが必要ではないかと思われる。おそらく正しく音を聞き取れないということは、発音がきちんとわかっていないということであろう。意味ではなく音がわからなかった語彙については、その場で正しい発音を一度でもいいから行うことが非常に大切であると思われる。

### 4-5 教室外活動の奨励

実際の発話に触れることで言語のインプットの種類、量は増える。つまり、クラス外でも聴解練習を行うことで、習得できる語彙や表現の幅が広がる可能性はきわめて大きくなるといえるだろう。例えば、視聴した番組の内容を書き留める簡単なワークシートを配布し、次回までに何かを視聴し、そこにまとめてくる。そして、授業の 10 分くらいでお互いに情報を交換し合うという活動を組み込むことで、教室外での聴解練習を奨励することができるのではないだろうか。誰かがいないとできない会話練習とは異なり、聴解は一人であっても練習ができるというところに大きなポイントがある。先生がいなければできないという学習ではなく、一人でもできるという自律学習の姿勢を養うためにも、聴解から教室外活動を奨励するというのは極めて大きな意味を持つように思う。

## おわりに

以上、日本語教育における聴解について考えてきた。聴解練習では「全部わからなくてもいいですよ。」という言葉が学習者にむかって言うことが多々ある。これまでは何の根拠もなくそういつていたのであるが、今回様々な先行研究に目を通し、聴解におけるポイントは「目的を定め、どの情報を聞き、どの情報を切り捨てるか」、そして「聞き取ったポイントとなる語から他の語を類推し、推測することができるか」であることが明確になった。だからこそ、「全部わからなくてもいい」のである。そして、何かを切り捨てていく代わりに、大切になってくるのが、「類推する・推測する」力をつけていくことである。類推・推測という方法で、聴解の要領をつかみ、語彙や文型の積み重ねによって力をつけ、最終的にはコミュニケーション能力が養成される授業が真の聴解授業というものであろう。実際にこれらの過程を組み込んだ授業シラバスの作成および授業実践を行っていくことを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 尹松 (2000) 「パターン学習は理解を促進させるか—ラジオニュースの聴解の場合」『日本語教育』112号 (pp35-44)
- 笠原ゆう子他 (1994) 「聴解テストの条件」『日本語国際センター紀要』(pp35-55)
- フォード順子他 (1990) 「聴解授業『講演・講義を聞く』を行って—聴き取りの負担を軽くするために—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』5号 (pp85-97)
- 土岐哲 (1988) 「音声教育の面から見た教科書」『日本語教育』59号
- 坂本恵 (1989) 「聞き取りのメカニズム—中級聴解練習のためのラジオ番組利用について」『講座日本語教育』第25分冊 (pp63-75)
- 吉岡英幸 (1980) 「大学予備教育における聴解指導の方法」『日本語学校論集』7号 (pp100-110)
- 當作靖彦 (1988) 「聴解の能力の方法と教材—聴解のプロセスを考慮した練習」『日本語教育』64号 (pp59-73)
- 国際交流基金 (2007) 『DVDで学ぶ日本語 エリンが挑戦! にほんごできます』凡人社

## A Study of the Listening Education in Japanese Language Education

Naoko KUWAHARA

*Course in Japanese Studies for Students from Overseas,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan  
(Received October 1, 2009)*

It is a characteristic of Japanese Education that many students have more difficulty in listening comprehension than in grammar comprehension or Kanji reading, especially when considering Chinese students, who are the largest group of learners of the language.

In this paper, through reviewing a number of articles in the literature and my experience of teaching, I look at Listening Education in Japanese Language Education based on the query: what is the meaning of listening activities and how do we process the listening in our daily life to improve students' listening ability.

Finally, I point out some areas in listening that could be improved, such as the importance of training a guessing ability.